

## マルコ16章16節「信じる者の救い」

### 1A 信じてバプテスマを受ける者

#### 1B 心の鈍い弟子たち

#### 2B バプテスマ

##### 1C 罪の悔い改め

##### 2C キリストの死

##### 3C キリストの甦り

### 2A 信じない者

## 本文

私たちが今朝、見ていきたい聖書の箇所は、マルコによる福音書 16 章 16 節です。「**信じてバプテスマを受ける者は、救われます。しかし、信じない者は罪に定められます。**」この言葉は、イエス様が弟子たちに語ったものです。三日目に墓の中から甦り、弟子たちの間に現れた時に、弟子たちに語られたものでした。

### 1A 信じてバプテスマを受ける者

#### 1B 心の鈍い弟子たち

イエス様はまず、「**信じて**」バプテスマを受ける者は、救われると言われました。「信じる」ということは、その行為自体はとても簡単ですが、とても難しい行為です。自分のこれまでの考えや経験、そして何よりも自分がこれまでは自分を信じてやってきたという自負を、捨てなければできないことです。

イエス様がなぜ、この言葉を言われたのか、その背景をお話したいと思います。イエスは、イスラエルの北部ガリラヤという地方で、宣教活動を行っておられました。ユダヤ人たちの信じる神の国がご自分によって来たのだという宣言を行われていました。彼らは聖書が言っているように、正義と平和が救世主であるキリストによってくるのだと信じていました。そして、自分たちの職業である漁師や収税所を捨てて、イエスに付いていきました。イエスは、数々の奇蹟を行われました。病人を直し、悪霊を追い出し、死人までを甦らせました。これは、ただ奇蹟を行なっているからすごいということではなく、何百年も前から預言者によって、キリストが行なうとされていた徴でした。

時は、ローマ時代です。人々は平和に暮らしていましたが、それはローマが数々の国々を打ち倒し、そのローマ軍は鉄の牙を持つ獣のように、それらの国々の軍を圧倒していった結果の平和です。武力によって人々の反乱を鎮圧したからに他なりません。そして、ローマから、当時知られていた世界を支配していました。これがローマ帝国であり、今のイスラエルもその支配の中にありました。ユダヤ人たちは、一神教を信じています。手で作った金銀や石の像は拝みません。けれ

どもローマは多神教で、いろいろな偶像を拜んでいます。それでローマはユダヤ人を統治するのに苦労していました。当時の社会は、今のような人権がありません。皇帝がそうしなさいと命じたら、選択肢はありません、それを必ずやらないといけないのです。

そのような中で、ユダヤ人はキリストを求めていました。彼らはローマの前はギリシヤ、ギリシヤの前はペルシヤ、そしてその前はバビロンというように、もう 600 年ぐらい他国の勢力の中で苦しめられていました。それでローマの圧政の中で生きていて、そこにイエスが数々の奇蹟を行ない、また神の国が近づいたという言葉語り、それでイスラエルの全域から人々がやってきました。そして、この方が自分たちの王になる、それがキリストなのだ願ったのです。

弟子たちもそれを願いました。イエス様が、ユダヤ人たちの首都エルサレムに向かわれる時に、そこでユダヤ人からキリストであるとみなされ、そしてローマの勢力を打ち砕き、彼らの王になってくださると期待していました。イスラエルをこの苦境から救い出してくれると願っていたのです。けれども、イエス様は全く期待外れなことを語り始められました。「マルコ 8:31 それから、人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちに捨てられ、殺され、三日の後によみがえらなければならないと、弟子たちに教え始められた。」ユダヤ人の宗教指導者からは見捨てられ、そして異邦人に殺されると言われたのです。

なんのことも、弟子たちは訳が分からなくなりました。そのこと自体信じがたいことだったのですが、「三日の後に甦らなければいけない」と言われます。まるで訳の分からない、終末に起こるはるか遠い出来事のように感じていたことでしょう。今の言葉で言うなら、SF 世界のことです。弟子たちは従来の、ユダヤ人たちが期待していたローマを倒して神の国ができるという考えから離れることができず、誰が王になるイエス様の右に座るのか、左に座るのか議論していたのです。

この弟子たちのことを、私たちは笑えません。私たちは、当時のローマ社会とは比べ物にならない程の自由が与えられています。けれども、そのような自由を享受しているでしょうか？自分たちにはどうしようもできない、強い束縛を受けていないでしょうか。今、送っている生活で良いのだと満足している人はいません。何をやってもよいという大きな自由が与えられているはずなのに、全く自分が自分の置かれているところで自由にされているという気持ちは起こっていないでしょう。自分自身が自由にされていないと感じておられるかもしれません。いずれにしても、何かここから脱却したいと思っておられるかもしれません。

そして弟子たちは、イエス様に付いていきました。イエス様は数日、エルサレムにおられて、夜にユダヤ人の宗教指導者によってやって来た者たちに捕まえられて、ユダヤ人の宗教裁判を受けます。そしてご自身がキリストであると言ったことで、なぐられ、縛られ、今度はローマ当局に引き渡されます。ローマだけが、当時は死刑にすることができたからです。その総督ポンテオ・ピラトは彼を尋問しても、どこにもローマ法に違反する罪が見当たりません。それで無罪を宣言しますが、ユ

ダヤ人の宗教指導者が煽り立て、騒動になりそうになります。それでピラトは、騒動を起こしたとして、自分がローマの本部から総督の職が罷免されるのを恐れました。それで無罪だと分かりながら、十字架刑に処しました。イエス様が言われた通りになったのです。

それで安息日が来ました。安息日には、誰も動いてはいけないというのがユダヤ人の律法でした。それが明けた朝から、イエス様に付いてきた女たちが、お墓の中で横たわっているイエス様の遺体に香油などを塗ろうと思いました。ところが、その洞窟を閉じていた石が転がしてあります。そして、そこには真っ白い衣を来た人が二人いました。そして、言いました。「恐ろしくなって、地面に顔を伏せていると、その人たちはこう言った。「ルカ 24:5-7 あなたがたは、なぜ生きている方を死人の中で捜すのですか。ここにはおられません。よみがえられたのです。まだガリラヤにおられたころ、お話しになったことを思い出しなさい。人の子は必ず罪人らの手に引き渡され、十字架につけられ、三日目によみがえらなければならない、と言われたでしょう。」それで彼女たちは、イエスが言われたことを思い出したのです。

それで彼女たちは、弟子たちのリーダーである 11 人の使徒たち伝えにいきます。けれども、彼女たちの言っていることが「たわごとと思われたので、彼らは女たちを信用しなかった。(ルカ 24:11)」とあります。マグダラのマリヤも、個人的に復活にイエスに会いました。それも信用しなかったのでしょうか。それから、すでにエルサレムから離れて、エマオという村に歩いていた二人の弟子もイエス様に会いました。彼らもエルサレムに戻って、復活したイエスに会いました。それでも信じませんでした。そして、ペテロ自身も復活のイエスに出会っています。それでも信じられませんでした。

ユダヤ人たちから、危害を受けるのを恐れて戸を閉じていた時に、それでもイエスがそこに来られて、彼らの中に立って、「平安があなたがたにあるように。(ヨハネ 20:19)」と言われたのです。そして、十字架によって刺し通された手とわき腹を彼らに示されました。弟子たちは非常に喜びました、けれども半信半疑でした。イエス様は、こう言われています。「なぜ取り乱しているのですか。どうして心に疑いを起こすのですか。わたしの手やわたしの足を見なさい。まさしくわたしです。わたしにさわって、よく見なさい。霊ならこんな肉や骨はありません。わたしは持っています。」それでも、彼らは、うれしさのあまりまだ信じられず、不思議がっているのです。イエスは、「ここに何か食べ物がありますか。」と言われた。イエスは、彼らの前で、それを取って召しあがられた。(ルカ 24:38-42) こうやって、弟子たちの心の鈍さを優しく叱責しました。それで彼らの心を開かせたのです。

そして、この言葉を言われたのです。「**信じて、バプテスマを受ける者は、救われます。**」と。まず、信じることです。二千年前に起こった出来事ですが、今も生きており、この方が新しい命を与えることを約束しておられます。もしかしたら、これまでこうした話を聞いてこられたかもしれません。けれども、まだ信じられないのかもしれません。自分のこれまでの考えや経験が邪魔しているかもし

れません。過去がそうだったから、これからもそうだと思っているでしょう。そして、これまで自分が自分を信じてやってきたという自負があるでしょう。そのプライド、自負心を捨てるのは並大抵のことではありません。イエス様についていった弟子たちさえが、この方の言われることを信じられませんでした。

実は、もう一人、その場にいなかった弟子がいました。トマスと言います。彼は、「私は、その手に釘の跡を見、私の指を釘のところに差し入れ、また私の手をそのわきに差し入れてみなければ、決して信じません。(ヨハネ 20:25)」と言いました。けれども、八日後に同じようにしてイエス様は、彼らの間に現れました。イエス様は言われました、「あなたの指をここに付けて、わたしの手を見なさい。手を伸ばして、わたしのわきに差し入れなさい。信じない者にならないで、信じる者になりなさい。」トマスが、「我が主、我が神」と言うと、イエス様は、「あなたはわたしを見たから信じたのですか。見ずに信じる者は幸いです。(ヨハネ 21:29)」と言われました。見ずに信じる者は幸いなのです。私たちは見なければ、見なければ、と思います。けれども、信じるのは見ないうちに信じるのです。見ないで信じた者たちが集まっているのが教会です。世界中に、キリスト以後の歴史の中で、何万、何億、何十億もの人々が、見えないで信じて幸いを得ました。目で見えなくとも信じています。しかし、イエスが生きておられる、ということを知っています。

そして、その生活、人生が変えられています。私は、抑鬱で大学の受験勉強をしている時に死にたいとよく思っていました。今は直っています。ここには、パニック症候群で電車に乗れなかった人もいます。けれども、今は地球の反対側まで飛行機に乗ることができています。他にも、私はアメリカで聖書教育を受けましたが、いっしょに勉強していた仲間の大半が、元麻薬常習者でした。ある人は何人もの女がいましたが、悔い改めて、一人の女性を妻として愛しています。普通的生活をしてきたつもりが、離縁して失敗した。けれどもイエス様に出会って、立ち直っているという人もいます。他に普通に生活しているけれども、空しさを感じていた。けれども今は満たされている、という人もいます。自分というもの、その自我は砕かれました。けれども、その砕かれた魂に、今も生きているキリストが働いてくださり、真実な平安を持っています。「わたしを信じますか。」とイエス様は言われます。信じる者は、救われます。

## 2B バプテスマ

イエス様は、「**信じてバプテスマを受ける者は、救われます。**」と言われました。バプテスマとは洗礼のことです。ただ水を顔にかけるのではなく、川など、水のある所において全身を水に浸します。そしてすぐに上がってきます。これをバプテスマと言います。これは水に入って、救いを得るということではありません。水に入ること、バプテスマを受けるところに、信じるとは何を意味しているかがよく表れているからです。自分の信じていることが、バプテスマの中で表れるからです。信じると言っても、どのようなことを信じて、どのような信仰を持っているのか、バプテスマにそれがはっきりと表れています。

## 1C 罪の悔い改め

ユダヤ人の人たちは、イエス様が表舞台に出てこられる前に、預言者でヨハネという人の説教を聞いていました。彼は主にユダの荒野にいて、ヨルダン川でバプテスマを授けていました。そしてそこで語ったことは、「時が満ち、神の国は近くなった。悔い改めて、福音を信じなさい。(マルコ 1:15)」と言いました。悔い改めるためのバプテスマをヨハネは説教していました。自分が行なっていること、神の前に罪を犯したこと。これを神の前に言い表して、自分を中心にした生き方から、神を中心にした生き方に思いを変えます。水の中に入るのは、自分とその水と一緒にいることを意味しています。そして水から出てきて、その新しい自分になったことを表しています。悔い改めを、単に口だけでするのではなく、生活をかけて、人生をかけて、この体で表すことを意味します。

ですから、信じるということは、悔い改めることでもあります。これまで自分が自分の人生の舵を握っていました。自分が船長でした。自分が主導権を握っていたところを、思いを変えて、神に、そしてキリストに握っていただくのです。その決断をすることが、「信じる」ことです。

## 2C キリストの死

そしてイエス様は弟子たちに、「父、子、聖霊の御名によってバプテスマを授け」なさいと命じられました(マタイ 28:19)。弟子たちはそれ以後、イエスの御名によるバプテスマを人々に授けました。イエスの名によるバプテスマとは何か？イエス・キリストは十字架に付けられました。十字架は、ローマ帝国の編み出した、最もおぞましい極刑の死刑台です。激痛が走る中、少しずつ息を止めていくようにさせています。窒息死によって死ぬようにさせています。しかし、イエスは何一つ悪いことをしていなかった、無罪であったことが、すべての人の証言で明らかにされています。イエスを裏切ったイスカリオテのユダでさえ、彼は何も悪いことをしていないと後悔して、自殺しました。

ではなぜ十字架に付けられたのか？それは、ご自身が人々の罪を赦すための代価として死なれることを話しておられました(マルコ 10:45)。つまり、私の罪のため、貴方の罪のために身代わりになって死なれたのです。人はみな、この天地を創造した神に罪を犯しました。自分を造られた方に目を向けていないことそのものが罪です。嘘をつく、自己中心的になる、怒る、不品行をする、妬むなどはもちろん罪ですが、それらを行なう根っこには、神につながっていないという問題があります。宗教でさえ自分を神から遠ざけることがあります。神の名によってなされる過去に行われた悪いことは、実は神を神とせず、自分を神として、神さえも自分の欲のために利用したからです。

そして罪を犯せば、裁かれなければいけません。神に裁かれなければいけません。死んで、死んだ後にだれもが神の裁きの場に行きます。生きている間に裁判所に出廷したことがなくとも、死後には必ず行きます。甦って、最後の審判を受けるのです。そして自分のした悪いことのためにその罰として、永遠の牢獄である地獄に引き渡されます。私たちはこのように、地獄に行くに値する者たちなのです。しかし、神はどんな罪人も愛しておられます。自分を見て、人を見て、こんな醜いものがある、汚いものがある、誰もが嫌がると思っているものを持っていても、それでも神は愛して

おられます。実に、罪人を愛しているために、ご自分の独り子であるキリストを身代わりに死なせました。それがキリストの十字架です。

ですから、イエスの名によってバプテスマを受けるとはどういうことか？この方が確かに、自分の罪のために死なれたことを魂と体をもって受け入れることです。他の誰かの罪ではなく、漠然とした全人類の罪ではなく、自分自身が犯した罪のために、自分自身を神が愛されて、それでイエスが私のことを思って死なれたことをそのまま受け入れます。バプテスマの水は、墓を表します。水に沈むことは、キリストが自分の罪のために死なれたことをそのまま受け入れて、自分も古い自分がキリストと共に死んだことを意味しているのです。

### 3C キリストの甦り

そして、バプテスマは水に浸されることだけを意味していません。水に沈んだままではありませぬ。水から出てきます。水から出てくるために、水に浸されます。同じように、キリストは死んだままではいたために十字架に付けられたのではなからぬ。十字架に付けられて、三日目に甦るために死なれました。復活の希望をもった死だったのです。このことを、自分のため、自分の新しい命のためだと信じていることが、バプテスマを受けることです。墓からイエス様が出てきました。同じように、罪の中で死んでいた自分がキリストと共に墓から出てくる、新しい命を得ることを信じます。自分は、イエスが死者の中から甦られたことを心から受け入れ、そして新しい命、永遠の命を得ることを信じているのです。

何となく、「ああ、イエスという人が生きてと言っているんだな。」と他人行儀に見るのではなく、まさに自分自身に神が命を吹き込まれるのだということを信じているのです。イエスが今も生きておられ、この方を自分の心にお迎えします。

### 2A 信じない者

しかし、イエス様はこう言われました。「**しかし、信じない者は罪に定められます。**」そうです、信じるという行為をするのです。そのためには、今までの自分のあり方を悔い改め、それでイエスを救い主として信じて受け入れます。しかし、もしそれを拒むのであればどうなのでしょう？そのまま残るだけです。罪がそのまま残ります。「罪に定められる」というのは、有罪になるということです。神がキリストによって罪の赦しを備えてくださったのですが、それを受け入れないで罪がそのまま残り、神は最もしたくないことを、強いて行なわなければいけません。罪の中に定めてしまう、つまり有罪にし、その罰を受けるようにしなければいけないということです。地獄というのは、人々が行きたくないのに神が無理やり投げ込むようなところではありません。地獄というのは、神が罪の赦しと永遠の命を与えることを約束されているのに、「いや、私はその必要がありません。」と言って拒むことです。自ら罪人のままで留まることを選ぶことを意味しています。神は誰も滅んでほしくありません。けれども、誰にも強制ができません。愛はその人の選択を尊びます。神は愛です。神はあなたを愛しておられます。ゆえに神を自分の王として主として受け入れませんか？